

コメント：四国遍路研究の立場から Comments

内 田 九州男
Kusuo Uchida

I have five comments I would like to make from the standpoint of research on the Shikoku Pilgrimage.

The first is in regard to the social strata of participants in pilgrimages and visits to sacred places. In the case of the Shikoku Pilgrimage, none of the ruling classes -- members of the imperial court, nobility, and samurai - took part.

The second point is the question of aid given to support the common people making the pilgrimage. Until now it has been thought that for the Shikoku Pilgrimage, aid (enjo) = hospitality (settai). Based on recent studies, however, it is said that the pilgrims were supported by donations of alms.

Third, there are the questions of the prohibition of women, discrimination based on social status, and participation of people with Hansen's disease in the pilgrimage.

A fourth question is that of the idea of salvation. In the case of the Shikoku Pilgrimage, as well, it is thought that salvation in the next life was an important element, but talk of profit in this life is prominent in every aspect of the pilgrimage, and "salvation" does not appear as clearly as in the Saigoku Pilgrimage of the Kinki District.

The fifth point is the timing of the popularization of pilgrimages. The popularization of the Shikoku Pilgrimage took place from the late Sengoku (Warring States) period to the early Edo period. Because a time of peace had come, the common people were able to set off on journeys. If it is true, however, that in the case of the Saigoku Pilgrimage popularization occurred in the mid-15th century, as the Sengoku period was beginning, I wonder what accounts for the difference.

お二方の具体的で貴重なお話ありがとうございました。

四国遍路研究の立場から、コメントをさせていただきます。いただいたレジュメを拝見して当初四点を考えていましたが、お話を聞いておまして急拠一点追加することにしました。

先ず一つ目。巡礼・参詣の参加者の階層の問題です。四国遍路の場合は、皆さんご存知のように、平安の頃から戦国期の終わりころまで、修行者、山岳修行者を中心に山岳修行の時代があって、戦国末に庶民が参加してきました。そこから江戸時代初期にかけて大衆化が進んだと考えられています。四国遍路の場合は、江戸時代を含めてですが、朝廷貴族そして武士といった人々の参加は全くありません。遍路はまさに庶民の世界です。その点が熊野参詣、西国巡礼のお話を聞いていてちがうなと思っております。この点についてどうでしょうか。

特に、四国遍路には近世社会の支配者だった武士の参加が全く見られません。阿波の慶長三（1598）年の駅路寺文書の宿を貸す対象の旅人一辺路の輩の内訳に「侍」と出て来ます。恐らくこれが武士の参加を示す唯一の例で、武士の参加を示すような資料は外にはないのではと考えております^①。

第二の問題は、庶民参加を支えた援助の問題です。この問題は熊野参詣で具体的に出してもらいましたので、参考になります。援助の問題といえば、遍路では接待と考えられておまして、よく議論されています。しかし、今年の私たちのこのシンポジウム・研究集会で井原恒久氏の「四国遍路における接待の『援助性』一文政期・天保期を中心に」と題した報告があり新しい見解を発表されました^②。井原氏は、遍路日記

のうち接待を克明に記録した遍路日記を検討して、遍路は接待で生きていく事は不可能であるという結論を出されました。接待は時期や地域等に偏りがあって、遍路をやっている間ずっと接待を受けているのではないのです。そこで考えられるのは托鉢というもので、遍路が沿道の家々の門口に立って、江戸時代にはきつとご詠歌だと思いますが、これを詠ってなにがしかの施しを得るといふものです。これが遍路を支えたのではないかというのが井原氏の見解です。この報告のもとになった研究は、『伊予史談』346-347号の2号(2007年7月・9月)^③に亘って掲載されています。これら二つの論文で井原氏の研究・提言は非常に鮮明に、かつ説得力のあるものになったのではないかと判断しております。

そうした目で見直してみますと、私たちが日常的に触れている文献にそのことが出ていることに気づきます。その文献は、宮崎建樹『空海の史跡を尋ねて 四国遍路ひとり歩き同行二人』(へんろみち保存協力会編)^④で、その解説編に「第16 托鉢について」という項があります。ここでは「托鉢」を「ご修行」とか「行乞」とも呼び、「道中の托鉢が(遍路の)義務」と記してあり、その意義や意味も詳しく記述されています。今でも托鉢をしている遍路はおられるのですが、托鉢そのものは実際にはほとんど忘れられているのではないかなと思われまます。

大正七(1918)年6月から12月にかけて大分の24歳の女性が四国遍路を行いました。後に日本の古代史研究で有名になる高群逸枝という女性です。彼女の遍路行は、同時進行という形で「九州日日新聞」に105回に亘って日々の内容が逐次掲載されました。これは、後に『娘巡礼記』^⑤として出版されます。この『娘巡礼記』には「遍路の者は幾ら金持ちでも日に7軒以上修行しなければ信心家とはいえない」という話があったり、またこの女性が心配で大分から付いてきた老人が修行に出る話が何度も記載されており、実際の修行を記録した得難いものでもあります。

この托鉢が遍路を支えてきたものではないかと私も考えています。こうした沿道の人々と巡礼や参詣に出た人々との関係は、熊野や西国ではどうなっていたのでしょうか？これを是非教えてほしい。托鉢は沿道の人々がたんに遍路を支えたという問題だけではなく、この行為を通して沿道の人々が弘法大師と結びつく、結縁するものだったのではないだろうかと思ひます。

第三は、女人禁制、身分差別、そしてハンセン病患者の参加の問題です。四国遍路の場合、札所の中の、土佐国の東寺(最御崎寺)、西寺(金剛頂寺)が江戸時代を通じて女人禁制でした。真念の『四国遍路道指南』^⑥に「東寺へハ女人禁制ゆへ此所へふだおさめ」「西寺へハ女人制し給うゆへ」と明確に記載されています。以後の『四国徧礼道指南増補大成』(明和四[1767]年刊)^⑦でも東寺には同じ記載があり、西寺では、女人禁制の言葉はありませんが、女性は別の場所で札を納めることを記述しております。実態的にも江戸時代を通してこの両寺は女人禁制だったようです。どうも四国遍路は江戸時代には女性を全面的に受け入れる形ではなかったと言えます。

つぎに身分差別の問題です。先程道後温泉のことがでましたが、確かに私たちも同じ史料に基づいて、遍路と道後温泉をあつかう場合、入湯料(湯銭)は無料だったと云います。しかし先程の真念の『四国遍路道指南』の道後の湯の紹介をしたくで、湯のうち「第五のハ非人并(ならびに)牛馬入り也」と明確に記述しています(後の『四国徧礼道指南増補大成』では道後の湯の説明そのものが書かれておりませんので、湯の区別も出てまいりません)。こうした身分差別が厳然と貫かれていた当時、はたして遍路は例外的存在だったのかどうか、大いに検討していかなければならないのではと思ひます。もし遍路は例外だった(一般の身分差別とは無縁だった)と言えるならば、それは非常に興味ある問題であり、十分に検討したいと考えております。

ハンセン病患者については確かに『四国遍路功德記』^⑧にはハンセン病患者が遍路に出て治癒した例が書かれております。かつて私はこの『四国遍路功德記』を検討したとき、真念はハンセン病患者に遍路への参加

を呼びかけたのだと評価しました。したがって真念は遍路にそうした人々も受け入れていくという考えをもっていたと言えます⁹⁾。

四国遍路は全体としては平等であらゆる人々を受け入れたんだというのではなく、かなり複雑な形相をもっていたのではないかと考えられます。そして歴史の中で開かれたものへと進展していったのだといえます。西国や熊野はこの点どうでしょうか。

第四は、救済の思想の問題です。北川さんのお話では、西国三十三ヶ所の場合はかなり強烈な救済思想をもって、それを前面に出しながら信仰を広げてきた面があると言えます。しかし、たとえば人がなくなって棺に本人を入れるときに、生前本人が集めてきた、札所の朱印を押した笈摺や朱印帳をいれるという形は真言宗信者の中にも行われております。四国遍路の笈摺や白衣、朱印帳もそのように扱われています。これは地獄に落ちない、極楽へいくためであって、この点是一緒だなと思いました。だが巡礼に出る時に四天王寺にお参りして、最後に善光寺にお参りするというのは初めて聞きました。四国遍路の場合、八十八ヶ所を終わって高野山へ行くというのが現在は行われています。私は、遍路の朱印帳を江戸時代のものから明治三十年代末くらいまでのものをとびとびですが、見ております。その時期までは高野山は出てまいりません。恐らく大正期に入ってから位に高野山の朱印がトップにすえられる仕組みみたいなものがでてくるのではないだろうかと推測しております。西国三十三ヶ所の巡り方や構成の問題などにもやはり時代的変遷がはいっているのではないかという思いがします。

さて遍路の場合どういう救済を約束したのか、という問題は実ははっきりしません。以前私が『四国遍路功德記』を検討して報告したときには、こゝには現世利益の話ばかりが出ていて、死後の世界、あるいは地獄に落ちない、このような話はまったくありませんでした。その報告をした時に、じゃあ四国遍路では来世の問題は全く扱わないのかと参加者の皆さんからかなりの疑問が出されました。そこで思い出したのが、私たちはこの報告の前に今治市県の越智家（善根宿をやっておられた）の遍路札を整理分析したことがあったことでした。文字が読める札が約1,000枚位ありましたが、時期は文化文政期（1804～1830）で、現存する遍路札では非常に古いものでした¹⁰⁾。その三割位に「現当二世安楽」という言葉が書いてありました。「現」＝「現世」の安楽、これは今生きている時安楽でありたいということです。「当」は、当然来たるべき世＝来世と解釈されていて、来世でも安楽にいたい、ということ。来世では地獄に落ちない、あるいは極楽とか浄土とか呼ばれるところで生きたい、そういう状態のところへ魂を置いておきたいということですかね、そういう願いが掲げてありました。死後に生きると言うのも変ですが、そういう考えです。したがって四国遍路の場合も来世の問題は重要な要素としてあるのかもしれませんが、西国三十三ヶ所のようにはっきりとは出ない。そこに四国遍路の特徴があるのではないかなとも思います。

熊野の場合は、小山靖憲『熊野古道』¹¹⁾を読みますと古代から中世にかけての熊野は現世利益の世界なのだという話が出てきます。四国遍路と共通する面も持っているなと思いました。しかし熊野も熊野権現を中心にして来世の問題を扱う場所でもありますから、私の印象とはすこし違うのかもしれない。

以上のように私は四国遍路の救済の思想はかなりボヤーとしておりましたが、西国三十三ヶ所巡礼や熊野参詣から見て、この点いかがでしょうか。是非ご意見をいただきたい点です。

最後に北川さんのお話を聞いていて、オーと思ったことがあります。四国遍路が大衆化するの、戦国末に庶民が参加してきてからですが、八十八ヶ所が成立するのは江戸時代初期と考えております。これは実は戦乱がなくなって平和な時代がきて、庶民が旅に出ることがかなり、あるいは大幅に可能になる時代であるからだと考えてきました。しかし、西国巡礼が大衆化するの、15世紀半ば、戦国時代へ突入する時期であったということになりますと、私たちが考えてきたことではダメなのか、という疑問が出てまいります。かたやこれから戦乱が各地で起こってくる、あるいは戦乱の中での旅だってありうることで、そういう中で

巡礼の大衆化が起こるとなると、あまりにも社会状況が違いすぎます。そういうことであるならば、時代背景というものをもっとつっこんで議論をしていかねばならないのではないかと思います。この点北川さんのご意見を是非お伺いしたい。

註①「一当寺の義、往還旅人一宿のため建立せしめ候条、専ら慈悲肝要たるべし、或いは邊路の輩或いは、出家に寄らず、侍・百姓行き暮れ、一宿相望むにおいては似合いの馳走有るべき事」（『四国霊場八十ハヶ所空海と遍路文化展』所収安楽寺駅路寺文書図版を読み下した。）

云うところは、当寺は往還旅人の一宿のための建物であるから、慈悲（の心）が大切である。遍路のともがら、出家に限らず、侍・百姓が行き暮れて（一宿を希望するならば、似合いの馳走（宿の提供）をすべし、といったところか。

②その報告は『現代の巡礼－四国遍路と世界の巡礼－公開シンポジウムプロシーディングズ』として2007年2月に刊行。井原氏の報告もここに掲載している。

③伊予史談会発行。

④第7版、2007年2月刊。

⑤朝日選書128。初版は1979年、朝日新聞社刊。

⑥『四国遍路記集 伊予史談会双書第3集』（伊予史談会、初版1981年刊）所収。

⑦近藤喜博編『四国霊場記集別冊』（勉誠社、1979年）。

⑧註⑥に同じ。

⑨内田九州男「願掛け・参詣・遍路（巡礼）」（『四国遍路と世界の巡礼 平成15年度愛媛大学国内シンポジウムプロシーディングズ』、同編集委員会編・発行）

⑩クアメ・ナタリー 内田九州男「江戸時代の1,308枚の史料－伊予国阿方村越智家の遍路札－」（『愛媛大学法文学部論文集人文学科編』第2号、1997年2月）

⑪岩波新書665（第一刷、2000年）。